神様と待ち合わせ

伊藤貴晴　作

【登場人物】

男１ 深田ショウ

女１ 小野マチコ

【１】

 夕暮れ。

 男１がベンチに座って本を読んでいる。

 女１、登場。

女１ あの

男１ え？

女１ どいてください

男１ はい

 男１は立ち上がる。

 女１はベンチに座って本を読む。

男１ あの

女１ はい

男１ どうして座るの？

女１ ここにベンチがあるから

男１ いや、そういうことじゃなくて

女１ どういうことですか？

男１ 俺が座ってたんだけど

女１ はい、知ってます

男１ じゃあ、どうして君が座るの？

女１ ここにベンチがあるから

男１ いや、だから

女１ ベンチって座るものですよね？

男１ そうだよ

女１ ですよね

男１ いや、そうじゃなくて

女１ 座っちゃいけないんですか？

男１ 俺が先に座ってたんだよ

女１ はい、知ってます。で、「どいてください」って言いました。そしたらどいてくれました

男１ 何で「どいてください」って言ったの？

女１ 座ろうと思ったからです

男１ ……

女１ どうかしました？

男１ いや、別に

 女１は本を読む。

女１ 「こんな夢を見た。腕組みをして枕元にすわっていると、あお向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかなうりざね顔をその中に横たえている。真っ白なほおの底に温かい血の色がほどよくさして、唇の色はむろん赤い。とうてい死にそうには見えない。」

男１ あの

女１ はい

男１ 何？

女１ 夏目漱石の『夢十夜』です。知りませんか？

男１ いや、知ってるけど

女１ ですよね。「しかし女は静かな声で、もう死にますとはっきり言った。」

男１ （遮って）いや、そういうことじゃなくて

女１ どういうことですか？

男１ 何してるの？

女１ 本を読んでいます

男１ 君は本を読む時、声を出すの？

女１ いけませんか？

男１ いけなくはないけど

女１ ですよね。「自分も確かにこれは死ぬなと思った。」

男１ 待って

女１ 何か？

男１ 気になるからやめてくれないかな

女１ いいですよ

 女１は本を閉じる。

男１ 本は読んでもいいよ

女１ 私、声に出さないと読めないんです

男１ 大変だね

女１ そうでもないですよ

男１ そう？

女１ 月が綺麗ですね

男１ え？

女１ まん丸

男１ ああ

女１ 今日は満月ですよね

男１ そうだね

女１ 良かった

男１ 君は何してるの？

女１ ベンチに座ってます

男１ それは見れば分かる

女１ 月を見てます

男１ そういうことじゃなくて

女１ あなたと一緒にいます

男１ え？

女１ いますよね、あなたと私、一緒に

男１ うん

女１ あなたは何をしてるんですか？

男１ 俺？

女１ はい

男１ 月が出るのを待ってた

女１ 月が出るのを？

男１ うん

女１ 出ましたよ、月

男１ うん

女１ それからどうするんですか？

男１ いや、別に

女１ どうもしないんですか？

男１ どうもしない

女１ 座りますか？

男１ 座っていいの？

女１ 相席でよければ

男１ いいよ

女１ どうぞ

男１ ありがとう

 男１はベンチに座る。

女１ 月に兎がいるっていうのは本当ですか？

男１ え？

女１ いるんですよね、兎

男１ さあ？　どうだろう

女１ かぐや姫は本当に月からやってきたんですか？

男１ そうだと思うけど

女１ 月にはそういうのがいるってことですね

男１ そういうのって？

女１ そういう変な生き物

男１ 変かな？

女１ 変ですよ

男１ どこが？

女１ いいですか。まず、かぐや姫は竹の中で栽培されてたんですよ

男１ 栽培とは言わないと思うけど

女１ かぐや姫って最初はとっても小さかったんです。それがたった三ヶ月で大人になるんですよ。変ですよ

男１ 変だな

女１ 兎も変です

男１ 変かな？

女１ 兎が月面でお餅ついてるんですよ。変ですよ

男１ 変だな

女１ 変ですね、月

男１ おとぎ話だよ

女１ 月を見るとムラムラする人いますよね

男１ そんな人いるの？

女１ いるじゃないですか。理性が抑えられなくて変身しちゃう人

男１ 変身？

女１ はい

男１ それは狼男のこと？

女１ それです

男１ 会ったことないけどな

女１ 変ですね、月

男１ 変だな

女１ どうして月を見てるんですか？

男１ え？

女１ 月を見て変身するんですか？

男１ しないよ

女１ しないんですか？

男１ しないよ

女１ どうしてしないんですか？

男１ できるわけないだろ

女１ できないんですか？

男１ できない

女１ 残念です

男１ もう一度聞くけど

女１ はい

男１ 君はここで何をしてるの？

女１ 待ち合わせです

男１ 待ち合わせ？

女１ はい

男１ 誰と？

女１ 神様

男１ え？

女１ 神様を待っています

【２】

 千夜一夜物語。

 男１が王を、女１がシェヘラザードを演じる。

男１ 神様？

女１ ええ、神様

男１ そんなものはいない

女１ （メモする）「そんなものはいない」。どうしていないと言い切れますか？

男１ 会ったことがない

女１ （メモする）「会ったことがない」。会ったことがないからいないと

男１ そうだ

女１ 王様に手や足はありますか？

男１ もちろん

女１ では心臓はありますか？

男１ 当然だ。なぜそんなことを聞く？

女１ 王様は自分の心臓を見たことがありますか？

男１ いや、ない

女１ （メモする）「王様は心臓を見たことがない」

男１ さっきから何を書いているんだ？

女１ メモです

男１ 何故？

女１ 王様のことをよく理解しようと思いまして

男１ 余計なことは書かなくていい

女１ （メモする）「余計なことは書かなくていい」

男１ だから

女１ 何ですか？

男１ 話の続きは？

女１ 話とは？

男１ 心臓を見たことがあるかどうかという話だ

女１ ああ、そうでした。王様は自分の心臓を見たことがないと言いましたね

男１ ああ

女１ 見たことがないのにあると言うのは、先程の話と矛盾しています

男１ それとこれとは話が違う

女１ どう違うのですか？

男１ 心臓は誰の体にもある。これは事実だ。だが神とはもっと不確かな存在だろう

女１ （メモする）「不確かな存在」

男１ 誰もその存在を確認することはできない。実体がないのだから

女１ 実体がないものは信じない

男１ そうだ

女１ 王様は、愛を信じますか？

男１ 愛？

女１ 愛です

男１ 先程言った通りだ。実体のないものは信じない

女１ 王様は愛を信じないと

男１ そうだ

女１ （メモする）「王様は愛を信じない」

男１ 無礼な女だ

女１ 気に入らなければ処刑してくださって結構です

男１ その言葉に偽りはないな

女１ はい

男１ 後悔するぞ

女１ いいえ。後悔はしません

男１ 口では何とでも言える

女１ ここは素敵な場所ですね

男１ ここか？

女１ 王宮の中庭ですか。風が涼しい

男１ ここは私の大切な場所だ。誰も入れない

女１ 私は入りました

男１ 君は特別だ。君は私の夜伽の相手をするのだからな

女１ そして処刑されるのですね

男１ そうだ。夜伽に来た女はみんな殺す

女 今日は？

男１ 今日はまだいい。明日だ

女１ では、また明日

男１ なぜ来る？

女１ なぜ、とは？

男１ なぜ殺されに来る？

女１ 逃げても捕まって殺されるのでしょう

男１ 死ぬのが怖くないのか？

女１ ええ

男１ なぜだ

女１ 愛です

男１ 愛？

女１ はい

男１ 私を愛していると言いたいのか？

女１ いいえ。私は愛を信じています

男１ そのために命を懸けるのか

女１ はい

男１ 女、名は何と言う？

女１ シェヘラザードと申します

男１ シェヘラザード

女１ はい

男１ 君は神に会ったことはあるのか？

女１ ええ、あります

【３】

 公園。

 男１と女１がいる。

女１ 「神様に会ったことがある」、女はそう言いました。これが『千夜一夜物語』、アラビアンナイトと呼ばれる物語です

男１ そんな話なんだ

女１ シェヘラザードが話す物語で有名なものがいくつかあります。シンドバットの勝手な大冒険、アリババと４万人のドームコンサート、アラジンと魔法のランプと愛の言霊

男１ 俺が知ってるのと違う

女１ シェヘラザードは毎晩おもしろい話をするので、王様は続きが気になってシェヘラザードを殺せないんです

男１ そもそも殺してしまうのが横暴だな

女１ 物語ですから

男１ そんなにたくさん本を持ってきたの？

女１ そんなにたくさんでもないですけど、一晩退屈しない程度には

男１ 暗いと読めないでしょ

女１ そうですね。だから懐中電灯があります

男１ へえ

女１ はい

男１ え？

女１ 照らしてください

男１ 俺は外灯じゃないよ

女１ 知ってますよ

 男１は女１から懐中電灯を受け取り、本を照らす。

女１ ありがとうございます

男１ 家で読めばいいのに

女１ いえいえ、そうわけにはいかないんですよ。あ、今の「いえいえ」は駄洒落ではないんですよ

男１ そんなこと考えてないよ

女１ 本当ですか？

男１ 本当だよ

女１ 私は目を見れば嘘かどうか分かります

男１ 本当に？

女１ 嘘です

男１ で、どういう理由なの？

女１ 神様から手紙が来たんですよ

男１ 手紙？

女１ ええ

男１ どういうこと？

女１ どういうことって言われても

男１ そもそも神様って何？

女１ 神様は神様です

男１ 神様っているの？

女１ いるんじゃないですか？　手紙くれたんですから

男１ 手紙ってどうやって届くの？

女１ 郵便屋さんが届けてくれました。こんな風に

 女１は郵便屋を演じる。

女１ 郵便です

男１ え？

女１ 小野さん。小野マチコさん

男１ 郵便受けに入れないの？

女１ 小野マチコさんはどこですか

男１ 一人二役にしたら？

女１ すみません、小野マチコさんがいないんです

男１ 自分でしょ

女１ この手紙を小野マチコさんに渡してください

男１ 君、誰？

女１ 郵便屋です

男１ 郵便屋？

女１ はい、郵便屋です

男１ え？　どういうこと？

女１ 手紙を届けています

男１ それは分かるけど

女１ 分かるんですね

男１ 家には届けないの？

女１ 家には届けないです

男１ どうして？

女１ 手紙は人から人へ届けるものですよ

男１ そういうことを聞いてるんじゃない

女１ 聞いてないんですね

男１ ここに小野マチコさんがいるってどうして分かったの？

女１ 郵便屋ですから

男１ でも今いないんだよね

女１ 仕方ないですね

男１ 俺、小野マチコさんって知らないよ

女１ 知ってます

男１ 君に言われることじゃないと思うけど

女１ この手紙を小野マチコさんに渡してください

男１ 分かった

 女１は男１に手紙を渡す。

女１ 今夜は月が綺麗ですね

男１ そうだね

女１ 良いお手紙だといいですね

男１ そうだね

女１ ではさようなら

男１ さようなら

 女１は元に戻る。

男１ 小野マチコさん

女１ はい

男１ 手紙です

女１ ありがとうございます

 男１は女１に手紙を渡す。

女１ ほら、手紙が届きましたよ

男１ そんな自信満々に言われても

 女１は男１に手紙を渡す。

 男１は手紙を読む。

男１ 「満月の晩に会いましょう」

 男１は女１に手紙を返す。

男１ 神様？

女１ 神様

男１ 神様

女１ 今日は満月ですよね

男１ そうだよ

女１ だから会えると思うんですけど

男１ 会えるかな

女１ 兎は神様の使いですよね

男１ そうなの？

女１ 因幡の白兎の話、知ってますか？　月まで行こうとした兎が鮫に襲われるんですけど、お餅を投げてやっつけるんですよ

男１ 俺が知ってる話と違うな

女１ だから兎は月でお餅をついてるんです

男１ そうなんだ

女１ ぺったんぺったん、はあどっこい。ぺったんぺったん、はあどっこい

男１ その掛け声、何？

女１ お餅をつくときの掛け声ですよ

男１ 初めて聞いた

女１ おめでたいときに餅まきをしますけど、本当は邪を払うために餅をまくんですよ

男１ 豆まきじゃないの？

女１ 豆なんかじゃ鬼は倒せませんよ

男１ 物理攻撃なんだな

女１ かぐや姫もきっと兎が連れて行ったんですよ

男１ 兎が神様の使いなら、神様は月にいるってこと？

女１ さあ？

【４】

 百夜通い。

 男１が深草少将を、女１が小野小町を演じる。

男１ さあってことはないだろ？

女１ だって分からないんだもの

男１ 百日通ったら結婚してくれるって言ったじゃないか

女１ そんな風には言ってない。毎日会いに来てくれて、私をものすごく愛してくれる人だったら結婚してもいいかなって言ったの

男１ 毎日ってどれくらい？

女１ とりあえず百日くらい

男１ とりあえずなの？

女１ 結婚したら毎日一緒なの。おじいちゃんになってもおばあちゃんになっても愛してくれる人じゃなきゃ嫌なの

男１ 君はおじいちゃんになるの？

女１ なりません

男１ 俺はおばあちゃんにはならないよ

女１ 当たり前でしょ

男１ こんなに君を愛してるんだ。分かるだろ

女１ 分からない

男１ じゃあどうしたらいいんだ？

女１ 証明してみせて

男１ どうやって？

女１ 毎日この木の下で待ち合わせをするの

男１ 毎日

女１ それを百日続けるのよ

男１ 簡単だよ、百日くらい

女１ 無理よ。百日なんて

男１ 愛に不可能はないよ

女１ 愛してるなんて今だけでしょ

男１ 愛は永遠だよ

女１ 心は変わるの

男１ 俺は変わらない

女１ もう諦めて。あなたとは結婚できない

男１ 諦めない。君が結婚すると言ってくれるまで、俺は毎日会いに来る

女１ 勝手なこと言わないでよ

男１ これは君との約束だ

女１ 私の心は変わらない

男１ いいや、必ず君を手に入れてみせる

女１ それ、おかしいでしょ？

男１ どうして？

女１ あなたの心は変わらないのに、私の心は変わるの？

男１ 愛は理屈じゃないよ

女１ 勝手な人

男１ 君は心変わりするんじゃない。君の本当の気持ちに気付くんだ

女１ 本当の気持ちって何？

男１ 本当は俺を愛してるってこと

女１ よくそんな恥ずかしいことが言えるわね

男１ 愛は人を大胆にするんだ

女１ 何でも愛って言えば片付くと思わないで

男１ 愛は偉大だよ

女１ そんな安っぽい愛はいらない

男１ 毎日来るよ。毎日会いに来る。だから待ってて

女１ どうせすぐ挫折するでしょ

男１ 俺を信じて

女１ 信じないけど待っててあげる

【５】

 公園。

 男１と女１がいる。

女１ 「待っててあげる」、女はそう言いました。これは小野小町の伝説、百夜通い（ももよがよい）の話です。深草少将（ふかくさのしょうしょう）は毎晩小野小町のところに通うんですけど、百日目に死んじゃうんです

男１ ひどい話だ

女１ どっちがひどいですか？

男１ どっちって？

女１ 男の方ですか？　女の方ですか？

男１ 救いがないって意味で、どっちもひどい

女１ そうですね

男１ 約束なんかしない方がいいよ

女１ そうですか？

男１ 期待するから傷つくんだろ

女１ 救われることもあります

男１ そうかな

女１ 本読んでもいいですか？

男１ 何読むの？

女１ 『夢十夜』をもう一度

 女１は本を読む。

 男１は本を懐中電灯で照らす。

女１ 「こんな夢を見た。腕組みをして枕元にすわっていると、あお向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはっきり言った。自分も確かにこれは死ぬなと思った。」

男１ 「そうかね、死ぬのかね。」

女１ 「死にますとも。」

男１ 「死ぬんじゃなかろうね、大丈夫だろうね。」

女１ 「でも死ぬんですもの、仕方がないわ。」

男１ 「じゃ、わたしの顔が見えるかい。」

女１ 「見えるかいって、そら、そこに、写ってるじゃありませんか。」

男１ 「その真っ黒なひとみの奥に、自分の姿が鮮やかに浮かんでいる。」

女１ 「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちてくる星の破片を墓標に置いてください。そうして墓のそばに待っていてください。また会いに来ますから。」

男１ 「いつ会いに来るかね。」

女１ 「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちてゆくうちに、――あなた、待っていられますか。」

男１ （頷く）

女１ 「百年待っていてください。百年、わたくしの墓のそばにすわって待っていてください。きっと会いに来ますから。」

男１ これも救いのない話だな

女１ そうですね

男１ それからどうなった？

女１ それから私は死にました

男１ 君じゃなくてこの女だろ

女１ あなたは女の言う通り、穴を掘りました。大きな真珠で

男１ 俺じゃない。この男だ

女１ そして私を埋めました。あなたは湿った土をかけてくれた。星の破片を墓標に置いてくれた。それからずっと待っています

男１ 俺はそんなことしてない

女１ 私の言ったとおり日が東から出ました。大きな赤い日でした。それがまた私の言ったとおり、やがて西へ落ちました。赤いまんまでのっと落ちていきました。一つとあなたは勘定しました。一つ二つと勘定してゆくうちに、赤い日をいくつ見たかわからなくなりました。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越していきました。それでも百年がまだ来ない。そしてあなたは思うわけです。自分は女に騙されたのではなかろうか、と

男１ 確かに今そう思ってる

女１ 私は死んだらどうやって会いに来たらいいんですか？

男１ こっちが聞きたいよ

女１ 土の中から出てくるんですかね？

男１ ちょっと怖いな

女１ そもそも身体なんか腐ってなくなってしまうと思うんです

男１ そりゃそうだ

女１ 骨だけ出てくるんですか？

男１ かなり怖いな

女１ それはおもしろそうですね

男１ おもしろくないよ

女１ では私は骨になって地面から這い出てくることにします

男１ 話を変えるなよ

女１ 話？

男１ 『夢十夜』では女は百合の花になって会いに来るんだろ？

女１ それは解釈の一つであって正確ではありません

男１ でも少なくとも物語の展開はそうだ

女１ そもそも私はこの女とは違います

男１ そうだよ。でも、さっきはこの本を読んでいて、だとしたら、俺は誰だ？

女１ 変なことを聞きますね

男１ 変なことを考えた

女１ 変なことを考えている状態を変態と言います

男１ 間違った情報を発信するな

女１ 蛹（さなぎ）が蝶になることを変態と言います

男１ うん

女１ 変態っていうのはみんな蝶になりたがってるんですよ

男１ 話を戻していいか

女１ どうぞ

男１ 君は『夢十夜』の女じゃないし、俺は『夢十夜』の男じゃない

女１ そうですよ

男１ それならいい

女１ いいんですか？

男１ 俺はこんな約束したくない

女１ 必ずしもしたくてするわけではないと思いますけど

男１ 俺は百年も待たない

女１ 本当ですか？

男１ 百年も待つ奴はバカだ

女１ 精神的に向上心のない者はバカですよ

男１ それは夏目漱石の『こころ』の台詞だな

女１ あなたは約束を守ります

男１ 勝手なことを言うな

女１ 百年待っていてくださいとか、月へ連れて行ってくださいとか、そういう無茶なお願いに応えてしまうんですよ

男１ 何？　月へ連れて行ってくださいって

女１ あれ？　言ってませんでしたっけ？

男１ 聞いてないよ

女１ じゃ、今、言いました

男１ どういうこと？

女１ 私は百年待ってくれとは言いません。月へ連れて行ってください

男１ そんな無茶なお願いがあるか

女１ お願いしますよ

男１ 無理だよ。バカじゃないの？

女１ バカって言う方がバカなんですよ

男１ その理屈は今、通用しない

女１ そんなことないです。あなたはバカな男だってことです

男１ バカにしてるのか？

女１ いいえ

男１ 俺は約束はしない

女１ じゃあどうしてここにいるんですか？

男１ え？

女１ あなたも誰かを待ってるんじゃないんですか？

男１ 違う

女１ 約束もしてないのに待ってるんだったら、もっとバカですよ

男１ 分かってるよ

【６】

 千夜一夜物語。

 男１が王を、女１がシェヘラザードを演じる。

男１ バカじゃないのか？

女１ ひどい。そんな風に言わなくても

男１ だっておかしいだろ。死んだ女がどうして会いに来るんだよ

女１ これはお話ですから

男１ 理屈に合わん

女１ 王様は理屈がお好きなんですね

男１ 筋が通らないと気持ちが悪いんだ

女１ なるほど。では王様に質問です

男１ 何だ？

女１ 永遠の愛を証明するためにはどうしたらいいでしょうか？

男１ 永遠の愛？

女１ はい

男１ 永遠の愛をどのようにして証明するか。これは難しい問題だ。証明するためには永遠に愛し続けなければならない。しかし永遠という時間は終わることはない。そうだね？

女１ はい。

男１ つまりその二つは矛盾している。永遠の愛を証明するためには、永遠が終わらなければならない。しかし永遠が終わるとしたらそれは永遠ではない

女１ その通りです

男１ どうしたらいいんだ

女１ 王様は随分変わりましたね

男１ 変わった？　どういうことだ？

女１ 王様が愛について考えています

男１ これは永遠の愛を証明するための考察だ。愛そのものを肯定したわけではない

女１ （メモする）「これは永遠の愛を証明するための考察だ」

男１ メモするな

女１ でも王様は愛が存在することを前提に考えていますよね

男１ ただの机上の空論だ

女１ （メモする）「ただの机上の空論だ」

男１ やめろ

女１ 王様語録も随分増えました

男１ 生意気な女だ。すぐに処刑してやろうと思っていたのにな。悔しいが、シェヘラザード、君の話は実におもしろい

女１ ありがとうございます

男１ 君がおもしろい話をしてくれる限り、君を殺すことはない。さ、次の話を聞かせてくれ

女１ 王様、今宵はこれで終わりです。続きはまた明日

男１ そうか。残念だな

女１ 王様はやはり変わりました

男１ そんなことはない

女１ 心が穏やかになりました

男１ 人間らしくなったとでも言いたいのか

女１ 卑屈なのは相変わらずです

男１ 君は相変わらず生意気だ

女１ 恐縮です

男１ 君が来るようになって、どれくらい経った？

女１ さあ？　どうでしょう？

男１ とうに数えられなくなった

女１ はい

男１ 永遠のような時間だな

女１ 王様

男１ 何だ？

女１ その多少なりとも人間らしくなった心で過去を振り返ることはできますか？

男１ 過去を？

女１ 王様は夜伽に来た女を毎晩殺していたことを覚えていますか？

男１ ああ。今にして思えば、悪いことをした

女１ では恨まれているということを承知していただけますね？

男１ 恨まれている。確かにそうだろう。でも誰に？

女１ 私にです

男１ なぜ君が？

女１ 王様は私の大切な友人を殺しました

男１ そうだったのか。すまなかった

女１ いいえ。謝罪はいりません

男１ しかし

女１ 私は王様に呪いをかけます

男１ 呪い？

女１ 初めてここに来た日から、私はこの木に呪いをかけています

男１ この木か？

女１ ええ。王宮の中庭の木。王様が夜風に当たる場所。王様の大切な場所。その木に私は呪いをかけます。七日では足りない。百日でも足りない。千の夜の呪い

男１ 千の夜の呪い

女１ 私は王様のもとへ千夜通います。そして千夜呪いをかけます。私の願いが叶えば、王様の命はなくなります。草木も眠る丑三つ時、丑の刻参りの時間です

【７】

 公園。

 男１と女１がいる。

女１ 草木も眠る丑三つ時、丑の刻参りの時間がやって参りました。丑三つ時って何時か分かりますか？　午前二時から二時半頃のことです。ちょうど今くらいの時間帯ですね。まず用意するのは呪いの人形。例えばこのようなものです。藁人形がポピュラーだと思いますが、現在はなかなか手に入りません。相手に見立てるための人形ですから、何でもいいと思います。では、この人形に、呪いたい相手の名前を書いたり、写真を入れたり、相手の身体の一部を入れたりしましょう。例えば髪の毛

 女１は男１の髪を抜いて人形にくっつける。

女１ このように髪の毛をくくりつければオッケーです。次に、釘を用意しましょう。本当は五寸釘がいいんですけど、五寸釘は十五センチ程の長さになりますから、これも手に入れるのは難しいかもしれません。突き刺さるものなら何でもオッケーです。服装は白装束にロウソクが一般的ですが、大切なのは気持ちですから、その時の気持ちに合った服を選びましょう。さあ、いよいよ丑の刻参りです。呪いをかける相手に憎しみを込めて釘を打ち込みましょう。これを七日間続けます。そうすると七日目に相手が死にます。じゃあみんなでやってみましょう。レッツ丑の刻参り

男１ 待て待て待て待て

女１ 何ですか？

男１ 何やってるの？

女１ 丑の刻参りの説明をしてました

男１ どうしてそうなったの？

女１ やってみたいなって思って

男１ そういうのって良くないんじゃないの？

女１ 迷信ですから。大丈夫ですよ

男１ ダメだよ。それ、俺の髪の毛がくっついてるやつだろ。死んじゃうだろ

女１ 信じてるんですか？

男１ 信じてないよ。でも嫌なの

女１ じゃあいいです。今度にします

男１ 俺に恨みがあるの？

女１ 乙女心は複雑ですから

男１ 自分で言うなよ

女１ 月が傾いてきましたね

男１ そうだな

女１ 月の兎がどんなのかっていうのを想像してるんですけど

男１ 兎だろ

女１ 白兎と黒兎がいるんです

男１ ふーん

女１ 白兎がベジタリアンで

男１ それ普通だろ

女１ 黒兎が肉食なんです

男１ それ兎じゃないだろ

女１ 兎っていう字と鬼っていう字が似てるじゃないですか

男１ 似てるか？

女１ だから兎って本当は鬼なんですよ。耳に見えるのは本当は角なんですよ

男１ へえ

女１ ぺったんぺったん、はあどっこいって言いながらお餅をついては投げつけて、それで手紙を食べちゃうんです

男１ 迷惑だな

 女１は「やぎさんゆうびん」を歌う。

男１ 手紙を食べるのはヤギだろ

女１ 兎だって食べますよ

男１ どうして月に行きたいの？

女１ 「Fly Me to the Moon」って知ってますか？

男１ ジャズの曲？

女１ そうです

男１ 知ってるよ

女１ 「私を月へ連れてって」って意味ですよね

男１ そういうこと？

女１ 百日通えとか、百年待てとか、月へ連れてけとか、みんなすごいですね

男１ 少しは相手に迷惑だって考えた方がいい

女１ そういう考えは情緒がないですよ

男１ 情緒って何？

女１ さあ？

男１ いつまでいるの？

女１ 夜が明けるまで。あなたは？

男１ 夜が明けるまで

【８】

 千夜一夜物語。

 男１が王を、女１がシェヘラザードを演じる。

男１ 夜が明けるな

女１ 王様

男１ 何だ？

女１ 私のお話は終わりです

男１ 終わり？

女１ 千日が過ぎました

男１ もうそんなに過ぎたか

女１ どうぞ殺してください

男１ 君の呪いはどうなった？

女１ 効果がなかったようです

男１ そうか

女１ さあ

男１ 君を殺すことはできない

女１ なぜですか？

男１ 君を愛しているからだ

女１ 王様は愛を知らないはずです

男１ 君が教えてくれたのだろう

女１ 私はそのようなことは教えてはいません

男１ 結婚してくれないか

女１ まさか

男１ 君は千日かけて私に人間らしい心を与えてくれた。感謝している

女１ 殺してください

男１ それはできない

女１ あなたは私の友人の敵（かたき）です

男１ 知っている

女１ それでも私と結婚すると言うのですか

男１ どんな償いでもする

女１ 償いなんかいりません。あなたは私が殺します。それができなければ自分が死にます

男１ 君は死んではいけない

女１ だって、結婚できるわけないでしょう

男１ なぜだ？

女１ だって、あなたを愛してしまったら、私は誰を恨めばいいのですか？

男１ 誰も恨まなくていい

女１ そんなことはできません

男１ シェヘラザード

女１ 月が沈んでしまいましたね

男１ 月？

女１ 月に兎がいるというのは本当でしょうか？

男１ 月では兎が餅をついているらしいな

女１ 丑の刻参りをしているのかもしれません

男１ そうかもしれない

女１ 夜が終わりました。私達の時間も終わりです

男１ 君がまた来てくれるまで、私はここで待とう

女１ 二度と会うことはありません

男１ 嘘でもいい。約束してくれ。もう一度ここへ来ると

女１ では、千年後にお会いしましょう

男１ 随分先だな

女１ いけませんか？

男１ いいだろう。千年後、また君に会おう

【９】

 公園。

 男１と女１がベンチに座っている。

男１ 千年前って平安時代か

女１ 『竹取物語』ができたのはもっと前です

男１ 千年も大したことないな

女１ そうですか？

男１ 覚えてられる時間ってことだろ

女１ 人は生きていられない時間ですよ

男１ 記憶には残る

女１ 月、沈んじゃいましたね

男１ ああ

女１ もう夜明けですね

男１ ああ

女１ 待ち合わせていた人には会えましたか？

男１ 会えなかった

女１ そうですか

男１ 君は？

女１ え？

男１ 神様には会えた？

女１ いいえ

男１ そう

女１ 神様は嘘つきなんでしょうか

男１ そうかもね

女１ 「Fly Me to the Moon」って、どういう意味か知ってますか？

男１ 私を月へ連れてって

女１ それは表の意味です

男１ 裏の意味がある

女１ 元々の題名は「In Other Words」っていうんですよ。「In Other Words」は「言い換えると」っていう意味です。「Fly Me to the Moon」を言い換えると「I love you」になります

男１ 知ってる

女１ 私はあなたの愛した人ではないけれど、私はあなたを愛しています

男１ ありがとう

女１ また会えますか？

男１ どうだろう？

女１ また会えたら、月へ連れてってくださいね

男１ 考えとくよ

女１ 月へ行ったら兎と丑の刻参りをしましょう

男１ 餅つきじゃないの？

女１ 兎が丑の刻参りなんて、変ですね

男１ 変だな

女１ それじゃ、さよなら

男１ さよなら

 女１、退場。

 男はベンチに置いてある本を見つける。

男１ 「すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びてきた。見る間に長くなってちょうど自分の胸のあたりまで来て止まった。と思うと、すらりと揺らぐ茎の頂に、心持ち首を傾けていた細長い一輪のつぼみが、ふっくらと花びらを開いた。真っ白な百合が鼻の先で骨にこたえるほどにおった。そこへはるかの上から、 ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花びらに接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。「百年はもう来ていたんだな。」とこの時初めて気がついた。

 男１、退場。

 終わり。